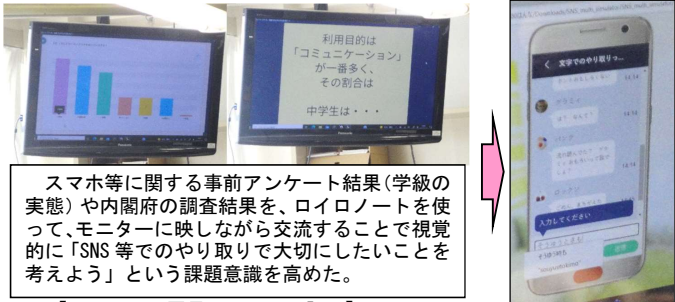




大原中学校 公開授業 第1学年1組 指導者 福田 圭佑 先生
道徳科 SNSでやり取りするために大切なことはなにか考えよう
「SNS マルチシュミレーター 文字でのやり取りって難しい」

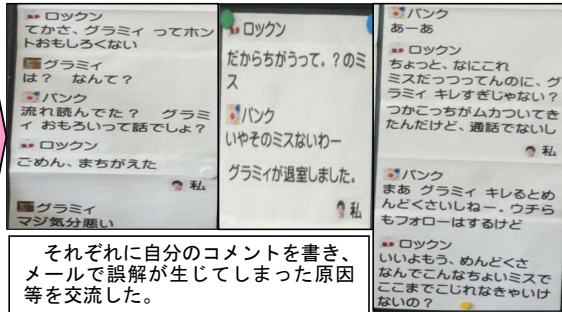
【主眼】 SNS上でのずれ違いを体験することで、互いが相手の立場や思いを考え尊重することの大切さについて考えることができるようにする。

導入



スマホ等に関する事前アンケート結果(学級の実態)や内閣府の調査結果を、ロイロノートを使って、モニターに映しながら交流することで視覚的に「SNS等でのやり取りで大切にしたいことを考えよう」という課題意識を高めた。

【2・3・4回目のコメント記入】



それぞれに自分のコメントを書き、メールで誤解が生じてしまった原因等を交流した。

マルチシュミレーターとは、SNS上で架空の3人とやり取りをする中で、コミュニケーションのズレやモヤモヤした状況を体感できる教材。やり取りに応じながら、自分の考えたコメントを書き込んでいった。

誰がどうすればよかったのかをワークシートのイメージマップに次のように書いていた。

- ・ ロックンは、誤字が起きないように、きちんと確認してから送る。
- ・ グラミイは、ロックンの話をしっかり聞く。
- ・ パンクは、ロックンをフォローする。



ワークシートに書いた自分の考えをグループと全体で交流した。



最後に SNS でやり取りするときに必要なこと、自分はどうしていきたいかを振り返った。

終末

＜宝城中学校 三淵 康弘 校長 による指導助言(要旨)＞

- ・ 福田先生は、ICTを授業で活用したり、子どものスキルアップをしたりしており、日常的な積み重ねが見えた。また、鹿児島での視察研修で学んだことを早速授業に取り入れ、公開授業で広げるといった学校体制が素晴らしい。
- ・ 今後は、生徒自身が当事者意識をもって考えていく「デジタル・シティズンシップ教育」をしていく必要がある。本日の授業は、この視点に立った価値のある授業であった。

参加者の感想

- ・ 実際に会っていても、人間関係づくりが難しい現状であるが、それ以上に、SNSでの文字でのやり取りは難しいと考えられる。学校での指導もどこまで入っていくか悩むところです。それらのトラブルを、自分たちで解決したり、回避したりする力をつけていくのは、喫緊の課題であると改めて感じました。
- ・ 本日の公開授業の内容は、そのままやっても大丈夫な内容で、実際来年度やってみようと思いました。また、他にもいろいろな内容があったので、実際に見てみたいと思いました。

子ども自身の解決力 伸ばそう

横浜創英中学・高校長 工藤 勇一 さん

いじめは大人の目の届かないところで行われるもの。ネットの発達で「目の届かないところ」は広がっている。私が校長を務める横浜創英でも、校内のネットワークではフィルタリングや通信記録が残る設定をしているが、生徒個人のスマホの中までは追いきれない。

ネット生活が欠かせなくなった今、子どもをネットから遠ざけたり、監視を強めたりしても、根本的な解決にはならない。子どもが自分たちで解決する力をつけられるよう教えていくことが大切だ。

私が子どもたちによく言うのは、いわゆる「ファクトチェック」の考え方だ。つまり、ある情報を目にした時、それは事実なのか、伝聞なのか、推測なのか、デマなのかを吟味することが大切であり、①情報が作られた目的 ②出どころ ③情報の具体性を考えるよう教えている。

たとえば、「生徒Aが生徒Bを殴った」という情報が流れてきたとする。深く考えなければ、「Aは悪いやつだ」と思ってすぐ拡散するかもしれない。

しかしファクトチェックの考え方をすれば、多くの疑問が浮かぶはずだ。「Aを貶めるための情報ではないか」「Aは本当に殴ったのか」。疑問が浮かべば、大勢が一人をつるし上げる「炎上」にもつながらない。これはネットに限らず、通常のいじめ対策にも有効だ。誰かの悪口流れてきても安易に同調せず、「誰が言ったの?」「どんな状況だったの?」と問いかける。悪口を言っている本人を立ち止まらせることもできるかもしれない。

子どもは多くのトラブルを起こすが、そこから学んで成長する。大人は目の前のトラブルが、子どもだけで解決できない問題かどうかを慎重に見極めなければいけない。

1980年代ごろからいじめが社会問題になり、学校や教師の対応が厳しく問われた。国は何か見逃しを防ごうと、いじめの定義を大きく広げた。結果、犯罪に近いものも日常的なけんかも「いじめ」としてひとくくりにされるようになった。

本来、考え方の違う他人と生きるのはとても難しく、学校はそのスキルを学ぶ場だ。しかし、いじめというあいまいな言葉が全面に出てくることで、教師も親も介入のタイミングがわからなくなり、子どもは学ぶ機会を失っている。

ネットの発達で、大人がすべてのトラブルを監視し、介入することの限界が明らかになった。今こそ子どもの問題と大人が介入すべき問題を整理しなおし、子ども自身のトラブル解決能力を伸ばすことが必要だ。

(朝日新聞 R4. 2. 27朝刊より)

「自ら考え行動できる教育」を

大原中の授業を見て重点目標が子どもたちの学びの姿に浸透しているよさを感じました。

学校の合言葉は「考動」(考え動く)。活動中、友達のタブレット上の操作がうまくいっていないと見るとずっと傍に寄って行き手助けをする子ども(右)。そんな目配りや心遣いができる学級風土が培われていました。終盤、福田先生の「SNS上でやり取りをするときに大切なことは?」という発問に対し、「送る前に誤解をさせる言葉になっていないかよく確認すること」「受け取る相手の立場になって考える」「顔の見えない相手だからこそ丁寧にコミュニケーションをすること」などの発言がなされました。現実の生活空間の中でこのような考え方・行い方が育まれているからこそ、ネット空間においても適切な考え方・行い方ができるものだと思います。「子ども自身の解決力を伸ばす」取組の具体を大原中の授業で見ることができました。併せて今回の授業で優れていたことは、事前に生徒のネット活用実態を的確に把握した上で授業での「仮想体験」につなげたことです。このため体験に基づく実感を深めることができました。大人の役割は、子どもの実態を見つめる確につかんだうえで、自己解決を側面から支援することだと考えています。 秋永

